

攪拌(かくはん)

攪拌＝混ぜる かき回すのではなく混ぜ込むという事です。

シンナーで薄めて使用する塗料というものは、顔料と有機溶剤でできています。

顔料と有機溶剤では顔料のが重いので分離・沈殿してしまいます。

また、顔料も軽い物や重いものがあり、色(原色)によって重さ(比重)がまちまちです。

例えば、グリーンの調合色があるとすると、この中入っている顔料は白、黒、青、黄です、重い順で並べますと、黄、白、黒、青で、長時間置いておきますと缶の底に黄色、上澄に青さらに有機溶剤が浮くという事になります。(塗料種により同じ色でも比重が違うため順番は変わります)

これを攪拌せずに使用しますと、最初青が強い緑でしゃびしゃびの塗料で後は薄黄色いドロドロの塗料となってしまいます。当然最初塗り始めた色と最後の色が違ったり、注文した色と違ったりしてしまい、一度上澄を出して使用してしまった塗料はいくら攪拌しても元の色や粘度に戻りませ「塗った色が違う」といったトラブルの原因で一番多いのが攪拌不足です。

混ぜたのに……いえいえ、くるくるかき回しただけでは塗料は簡単に混ざりません。

では、どうしたら？

出来れば機械を使用するのが一番です、刷毛製造メーカーよりインパクトドライバーに取り付けて使用するものも販売されています。

One-hand ミキサー「ドラゴン」

長さ 300mm
65φ

●インパクトドライバー
6系軸チャック使用可能

羽形状
上羽
下羽

流動の様子
対象容器使用の場合に限る

回転工具

注) 容器形状が大きいと壁面との反発量が少ないため流動がよくありません。

ハンド攪拌用 PAT.P

スモールミキサー

攪拌棒

- 缶口 #40 #50 (シンナー缶) にも楽々投入
- 30 パイのインペラーにより缶底角まで確實攪拌
- ハンドタイプで片手で楽々作業
- エアードリル / 電動ドリルのチャックに装着可能
- SUS304 の採用により洗剤など化学薬品にも安心仕様

商品の特徴
スモールミキサーは主に塗料、インクなどの口径(#40)容器での使用を目的にされています。従来は原色の場合ゆすったり振ったりと底部分に顔料や染料が混ざりきらず残っていましたがスモールミキサーを使用する事によって確実にスミまで攪拌する事ができます。又、缶天板部分を開口させずフタ部分から直接投入し攪拌する事が出来ます。又、容器内部での攪拌により飛び散りがなくハンドタイプのエアツールなどで手軽に扱うことが出来るのが特徴です。

が……なかなかそこまでは……

では、手攪拌の仕方のコツを紹介しますのでがんばって攪拌しましょう！！

慣れれば数分で攪拌できるようになります。

丸缶編

- ・まず、蓋の周りのほこりやゴミを取り除きます
- ・次に攪拌棒で缶の底をこそいで沈殿を確認します。
- ・棒の先端についで固まりが沈殿した顔料です。
- ・これが消えるまで、下から上に塗料を持ち上げる様に卵を混ぜる要領で混ぜます。
- ・缶の底をこそいで固まりが無くなるまで攪拌してください。

攪拌前は 樹脂と顔料
が分離している



缶の底に固まりがある様子



一斗缶編

- ・缶の口から長い棒を入れて丸缶と同じ様に底をこそぎます。
- ・しっかりこそいだら棒を取り出し蓋を閉めます。
- ・缶をひっくり返して前後に強く動かします。画像1
- ・缶を横にして前後に強く動かします。 画像2
- ・缶を正常に立てて前後に強く動かします。画像3
- ・1～3を1セットとして5～10セットを行い、缶の底の沈殿が無くなれば完了です。

注意事項！

蓋が閉じているか確認の上
缶をひっくり返さないと漏れる恐れが
ありますので注意してください！

画像1

画像2

画像3



色確認

丸缶は蓋の真ん中、一斗缶は天板の角にポッチが打ってありますので、その横に同じようにポッチを打ってください。
打った直ぐは色が薄く見えるはずですが、時間をおいて乾いてから見比べてみて同じ色になれば攪拌できています。
もし色が違う場合はご連絡、もしくはお持ちください、直ちに調査いたします。



ワンポイント

冬場に塗料が固い時はお湯に10分程浸して柔らかくしてから攪拌すると混ざりやすいです。

缶ヒーターを使えば安全で早く温まります。



電気用品安全法
適合品

缶を直接温めて、
溶剤を扱いやすくします。



ワンタッチで
取り付けできます。



もしも長期在庫の調色品をご使用の際は、一度店頭までお持ち頂ければサイクロンミキサーにて攪拌し色確認まで無料でさせていただきます。(当店でご購入商品に限る)